

## 《書評》

今年度も書評を寄稿して下さった方々に御礼を申し上げます。今回も、研究者だけでなく、学部生の書評を含めた、計7本となりました。ぜひ、お楽しみください。

- ◇ 書評は寄稿者の名字/Last Nameを「あいうえお順」に並べてあります。
- ◇ 編集作業は、2月下旬に行いますので、それまでに、原稿をいただけたらと思います。原稿は、宮崎までお送りください。送付先：arata(アットマーク)meijo-u.ac.jp

- .....
1. 平川秀幸（2013）「原子力事故の『途方もなさ』をいかに理解するか」中村正樹（編）『ポスト3・11の科学と政治』ナカニシヤ出版【秋山日華里（静岡県立大学国際関係学部 藤巻ゼミ生）】
  2. ティム・ブラウン（2014）『デザイン思考が世界を変える—イノベーションを導く新しい考え方』（千葉敏生訳）早川書房 [Brown, T. (2009). *Change by design: How design thinking transforms organizations and inspires innovation*. Harper Business: New York.] 【久保田絢（愛知淑徳大学教員）】
  3. 山田規畝子（2013）『高次脳機能障害者の世界—私の思うリハビリや暮らしのこと 改訂第2版』協同医書出版社【平田亜紀（愛知淑徳大学教員）】
  4. 大沢昇（2015）『クジラの文化、竜の文明：日中比較文化論』集広舎【趙師哲（愛知淑徳大学教員）】
  5. 富田英典 [編]（2016）『ポスト・モバイル社会：セカンドオフラインの時代へ』世界思想社【宮崎新（名城大学教員）】
  6. アンソニー・ギデンズ（1993）『近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結』（松尾精文ほか訳）而立書房【宮武蓮（静岡県立大学国際関係学部 藤巻ゼミ生）】
  7. 好井裕明（2015）『差別の現在—ヘイトスピーチのある日常から考える』【宮脇かおり（立命館大学教員）】

平川秀幸 (2013) 「原子力事故の『途方もなさ』をいかに理解するか」 中村正樹 (編) 『ポスト3・11の科学と政治』 ナカニシヤ出版

秋山日華里

(静岡県立大学国際関係学部 藤巻ゼミ生)

本章では政治哲学者ハンナ・アーレントの議論をひきだし、現代における科学技術文明のありかたについて検討している (p.282)。福島第一原子力発電所の事故が引き起こした「途方もなさ」が、私たちに我々人間の作り出したテクノロジーが手のとどかないところまできてしまったということを経験させたのである。

「途方もない」科学技術の発展、それに関する事故が発生してしまう根底には「すべては可能である」という信念が存在しているとされる。そして様々な要因から、それを「途方のなさ」として理解することさえ難しくなっていることをあげ、これを理解していくために言論と思考を通じて「意味」を回復し、科学技術に関する判断をできるようになることが大切であるとした (p.283)。

アーレントは人間の活動力を三つに分類した。人間の条件である生命とそれ自体のための生産と消費能力をもつ〈労働〉と、人間の条件である世界性のための創作能力をもつ〈仕事〉、人間の条件である出生や複数性(言論とともに)のための創始能力をもつ〈活動〉である。そしてアーレントは〈活動〉が最も政治的活力であるとした (p.241)。

このようにしてアーレントは政治的生活を中心においた人間世界のリアリティを示し、そして「全体主義」の中に誤った信念を二つ見出した。そのうちのひとつ「すべては可能である」という信念は、人間の生を可能にする人間の条件という概念に反する、つまり「予想しえないこと、限りなく不可能に見えることでも人間はなしうるという〈活動〉の能力に対して、それが度を越して、世界と人間にとって破壊的になってしまわないよう、わきまをべき限界を示しているのである」 (p.243)。

さらにアーレントは「地球疎外」 (p.252) という言葉を用いて、人間が〈仕事〉によって作り出す「耐久性」や「永続性」などからなる「世界性」が人間から地球規模で失われていくことを示した。そしてそれは科学の変容のことである。多くの「科学技術」や「実験」が進歩し研究が進んだため、思考する≒観照することでは「確かさ」が示せなくなり、「鑑照という精神的営為そのものの意義がなくなってしまった」 (p.255) からであるとされる。そしてこのことは「人間の条件を度外視」することになった。そして「宇宙的視点に立つことによって、より普遍性のある知識を手に入れ、いっそう強力な技術力を手に入れることができたが、同時にそのことが、人間が住む「世界」を不安定にするだけでなく、生存の条件すら脅かすことになった」としている。

以上のアーレントの議論から平川は、この科学技術(とそれに関わる事故など)の「途方もなさ」を「すべては可能である」という信念をふまえて考察した。この「途方もなさ」の「途方もなさ」とは単に甚大な被害や損失を示しているだけではなく「そこまで途方もないことを人間ができてしまうことの途方もなさであり、それがどのようにして可能になってしまったのか」 (p.260) ということである。

そして平川は、この現在「科学技術」の恩恵を受けてしまった世界では、この「途方もなさ」を理解することすら困難であるとした。その理由として平川は「現代では物事や行為、経験の「意味」をめぐる言論と思考の衰退」をあげ、アーレントのいう「思考なき被造物」 (p.270) にならないために、「語りのフレームを広げていく可能性を探っていく必要がある」 (p.283) と考えている。

ティム・ブラウン (2014)『デザイン思考が世界を変える—イノベーションを導く新しい考え方』(千葉敏生訳) 早川書房 [Brown, T. (2009). *Change by design: How design thinking transforms organizations and inspires innovation*. Harper Business: New York.]

久保田絢  
(愛知淑徳大学教員)

本書のテーマは「デザイン」である。著者のティム・ブラウンはデザインコンサルタント会社 IDEO の社長兼 CEO を務める。したがって本書は研究書ではなく、実務家が自らの経験から確立した「デザイン思考」という「世界観」の全体像を説明したものである。

この本を取り上げた理由の1つは、デザイン思考の影響力の大きさである。周りを見渡せば「看護デザイン」「ライフデザイン」「コミュニティデザイン」「カリキュラムデザイン」「コミュニケーションデザイン」など、教育、医療、ビジネスなど幅広い分野でマジックワードのように「デザイン」という言葉が溢れている。このデザインブームの火付け役の1人が本書の著者ティム・ブラウンであり、彼は世界でもっとも影響力のあるデザイン思想家の1人であると言える。本書はデザイン思考の原理や手法が理解できるように書かれており、現代のデザインブームの背景やあらゆる分野で使われ始めている「デザイン」という言葉が何を意味しているのかを体系的に理解するのに役立つ本であるといえる。

「デザイン」と聞くと、衣服をデザインするとか機械をデザインするといったことを思い浮かべる人も多いであろう。ブラウン自身も当初はファクシミリのデザインなどいわゆる工業デザインを手掛けていた。ここでいうデザインとは完成済みのアイデアをより魅力的に形作るものである。

しかしその後、ブラウンは IDEO の創始者のデイヴィット・ケリーらの影響を受け、「デザイン」を思考あるいは探究のプロセスと考えるに至る。例えば自転車であれば、自転車の製品自体をデザインする、

すなわち自転車の外観や機能を考えるのが一般的なデザイナーの仕事だとすれば、「どうすれば楽しく自転車に乗れるだろうか？」を考え、自転車の体験全体をデザインしようとするのがブラウンのいう「デザイン」の考え方である。今挙げた自転車の例のような製品開発や問題解決のプロセス全体にデザイナーの思考を取り入れるアプローチをブラウンは「デザイン思考 (design thinking)」と名付けた。

一般的に使われるデザインとデザイン思考との違いを理解するのは容易ではないが、本書は豊富な事例を通じてデザイン思考の原理や手法が理解できるように書かれている。「デザイン思考は「物語」という豊かな文化でこそ力を発揮する」とブラウンが書いている通り、抽象化を避け、具体的なコンテキストの中での語りへのこだわりが見られる。その事例は製造業の製品開発から旅行などのサービスの充実化、医療サービスの向上、教育プログラムの改良、貧困や環境問題などの社会問題の解決に至るまで広範囲に及び、また、地域も欧米、アジア、アフリカとさまざまである。このことはデザイン思考が応用できる範囲がいかに広いかを物語っている。言ってしまうと至る所にデザイン思考は応用可能であるということである。したがって、ビジネスに関心のある人から教育関係者、コミュニティ開発に携わる人、環境や貧困などの社会課題に取り組む人まで創造的に課題解決に取り組むことに関心のある人なら誰でも一読の価値がある本であるといえる。

本書で説明されているデザイン思考のポイントを2つ挙げると、1つは人間中心の思考であるという点であり、もう1つは統合的なアプローチであるという点であろう。人間中心の思考であるというのを理解するには、技術に偏った視点と比較するとわかりやすい。先ほど挙げた自転車を例で言うと、自転車の機能性、フォルムの美しさなど製品自体に目を向け、改良を進めようとするのが技術に偏った視点である。一方人間中心の視点というのは、自転車のユーザーの視点に立って製品開発を進めるということである。例えばユーザーの幼少期の自転車体

験や自転車に対して抱いている感情について観察やインタビューを通じて把握し、ニーズや問題を突き止める。そこからその問題を解決するアイデアを創造し、プロトタイプを製作し、試し、フィードバックを得ながら、製品を反復的に改良していくという流れで製品開発を進めるのである。このプロセスの中心には常に人間がいる。そしてこの一連の流れのすべての過程で人間の直観や感情といった右脳的な要素を重視している。ここには技術に偏った視点からのイノベーションには限界が来ており、人間中心のアプローチこそが今後企業が生き残る道であるというブラウンの主張が反映されている。

また、ポイントの2つめに挙げたデザイン思考は統合的なアプローチであるというのは、従来のデザイナーの役割とデザイン思考家の役割を比較すると理解しやすい。従来のデザイナーは完成されたアイデアに「化粧をほどこす」ようなものであるとブラウンは本書で述べているように、製品開発の最初の段階（ニーズの掘り起こし）からデザイナーが関わることはなかった。一方デザイン思考家は製品開発であれば、ニーズの掘り起こしから、製品・サービスのアイデアの創造・製作、販売戦略までの全体のプロセスをデザインするという役割を担っている。デザイン思考とは統合的に考える能力なのである。

本書で紹介されている IDEO の取り組んできた事例の中で私が特に興味を持ったのは、教育にデザイン思考を取り入れる試みである。教育の事例には、アクティブラーニングをどう有意義なものにしていくかのヒントが数多くちりばめられている。

ブラウンは教育を「長期的な影響力をもたらす最大の機会」と位置づけ、「次世代のデザイナーを教育するだけでなく、教育そのものを改革し、人間の創造性の膨大な宝庫を解放するには、どうすればよいか？」という課題に力を注いでいる。ブラウンによれば、IDEO が公立学校や私立学校、財団などの教育プログラムや大学からの依頼が増えているという。IDEO は子どもの自然な実験心や工作心を摘み取るのではなく、むしろ奨励して伸ばす教育経験を

築き上げるための教育デザインをクライアントと共同で行っている。美術学校で伝統的なアートスクールの構造の中に利用者中心の調査、ブレインストーミング、類似物の観察、プロトタイプ製作といったデザイン思考の原理を取り入れ、美術教育の戦略計画を築き上げた例や、医学、ビジネス、法律、エンジニアリングなど、多岐にわたる分野の大学生が集い、公共の利益を目的とした共同デザイン・プロジェクトに取り組むスタンフォード大学のハツ・プラトナー・デザイン研究所（通称 d スクール）の例などが紹介されている。

こういったデザイン思考を教育を含む様々な分野に取り入れる動きが日本でも進んでいることは冒頭で述べた。これからの世代にデザイン思考を身につけさせるために、我々教育者はデザイン思考家になることが求められている。

---

山田規敏子 (2013)『高次脳機能障害者の世界—私の思うリハビリや暮らしのこと 改訂第2版』協同医書出版社

平田亜紀  
(愛知淑徳大学教員)

この書籍の大部分の執筆にあっている山田氏は、3度の脳出血を経験し、その過程で高次脳機能障害という脳の障害<sup>\*1</sup>を負った人（医師）である。山田氏は自身の状態を「脳が壊れた」と表現し、その障害とともにある現実を描写している。大きめの活字で150頁強にまとめられたこの書籍の中には、さまざまな要素が含まれている。障害を持つ当事者である山田氏の日々の体験がつづられる手記であることはもちろん、障害をもった人のリハビリに携わる医療者へ行動や思考が規範から外れてしまう人—差別的な表現を恐れずにしかし読み手に判りやすく表現するなら知能指数の低い人や身体の不自由な人—と対するにありがちな傲慢な思い込みで接してはならないという警鐘を鳴らすという側面があり、また当事者から発信される社会の変

革のあり方への提案というアドボカシーの側面もある。最後の要素に関しては、山田氏の他の著書\*2に比べややその切り口は精細を欠くのだが、それでも社会のインクルーシブネスを謳うメッセージが込められている。読者は山田氏を通して障害を持って生きる当事者の世界観に触れることで、「脳が壊れつつ」も自我を保ち社会生活を営む人々の混乱と、驚くほどの知能の高さ、あるいは〈普通さ〉を少しでもだけ覗くことができる。

ところで、これは教科書（医学書）ではない。一般書として購入できる。ネット通販の書評では、投稿数自体が少ないものの、概ね好評を得ている。これは素晴らしい事だと思う。ただ、そのレビューにやや違和感を覚えざるをえない。この書籍には、読者を引き込むような、ある種のフィクション小説のような波乱にとんだ展開があるわけでもなければ、「感動ポルノ」と呼ばれるようなサクセスストーリーが描かれているわけでもない。また、読了後に爽快感が味わえるような社会の理不尽に対する制裁を見届けることができるわけでもない。この書籍にあるのは、自分で認知できる失敗と周囲から指摘されるたびに認知せざるを得ない失敗の両方を意識することからくる息も詰まるような閉塞感と、そのような日々のなかで山田氏が気付くことのできた周囲の人々のほんの少しの優しさのかけらを集めた記録だ。このような内容に対して、医師が分かりやすく当事者目線で患者の日常を解説していることに素晴らしさがあるとするコメントがネット通販の書評では散見されるのだが、少なくとも私にはそれらを読み取ることが困難なのだ。他者の所感に苦言を呈するはそもそも無意味な行為だが、少なくとも「読みやすさ」はない。むしろ「読みづらさ」しかそこにはない。先に述べた自分の認知できる失敗は内省とも呼べる。自分では気づきえない失敗は、他者の視線を介した気づきといえるかといえば、そうでもなく、その実指摘されてもそれを理解する能力がない場合さえある。それらに関する具体的な事例があることから、この書籍は障害を抱えた人のコミュニケーション行動を学ぶ読者にとって分かり

やすい部分もたしかにある。しかし、一見どこまでも普通に見える文章には、丁寧に読もうとすればするほど読みづらさが見つかる。そしてそこに潜むある種の不気味さこそが山田氏の置かれた状況を鮮明に映し出している。これこそがこの書籍の優れたところで、コミュニケーションの研究領域の書評として紹介するに値すると考えた。

まず、これは著者である山田氏も強調しているのだが、この書籍は医師の資格を持っている者だから書けたわけではない（実際、医師として活動していた時の山田氏は整形を専門としており脳神経は畑違いだ）。そもそも、この書籍には医学的な何かが山田氏によって記されているわけではない。山田氏いわく医師になる過程は論理的なトレーニングを積む必要があり、その考え方が自身の状況を客観視するのに役立つ、より読者に当事者の置かれた状況を説明するのに役立っているのだとか。つまり学生時代とそれに続く見習いの時代に要求された高次思考の訓練の幾ばくかが幸いにも病によって取り上げられなかったために書けた作品なのだ。その残された高い知能と訓練によって培われた情報収集・解析能力に補完された情報を我々読者が受け取ることができるのがこの書籍の最大の魅力であるといえよう。また、あえていうならば、診察室のあちら側（医師であった経験）とこちら側（患者となった経験）の両方を体験する機会を得たからこそ、聴き手のニーズが的確に予測でき、語り手としての能力が磨かれたのだと想像できる。

ところで、たびたび「読みづらさ」があると記したが、この書籍を手にした日から私がなぜそう感じていたのかをこの書評を書くに当たり考えてみた。他の人たちが称するようにある意味「読みやすい」それなのに「読みづらい」という感覚ばかりが残る。この感覚はどこからくるのだろうか。私はテキスト分析を専門としているわけでもまして言語療法士でもないのだが、山田氏の文章はあきらかに不思議な印象を抱かせるのだ。「ちぐはぐ」という言葉が近いのかもしれない。

初年次教育に携わっていてよく見かけるような

拙さはない。むしろ洗練された難しい語彙がちりばめられており一文一文は完成されており山田氏の国語力の高さを伺わせる。しかし段落や章、節のレベルにおいて論旨が明瞭であるというには詰めの甘さというべきか文学小説でもないのに煙に巻かれたような幻を追いかけるような手ごたえの無さが残る。訳文のような語順の不自然さがあるわけでもない。それなのにときとして唐突に話題が変わる。だが、脈略がないと切り捨てるには一応の流れはある。随筆というにはやや美しさに欠ける。構成の善し悪しに関しては、そもそもそのような議論が無意味な種の書籍なので避けたい。強いて言えば、論文の覚書のようなものだろう。山田氏が自身の行動をふりかえり、ある規範を外れた行為とそれをする要因についての山田氏流の解釈がなされていることから、そう称しても良いのだと思われる。まるでそのすべてが食べられる食材のかけらで作られた料理なのに、それを1つのプレートに載せることは〈ふう〉の人では行わないだろうと思わせるアンバランスさがあるのだ。このアンバランスさに読者が気がつけば、まさしくこれは脳の壊れた人の書いた文章だのだと、後の山鳥重氏の解説を借りて発見できるのだが、それも一読しただけでは、残念ながら私にはたどり着けなかった。山田氏はたびたび自身が「脳が壊れた」を持つ者だと表現しつつ、すべての能力が等しくなくなったわけではないことを読者に理解させようと工夫をこらす。一方で平均的な知能よりも高い部分もあれば、著しく平均を下回る部分もある。それは山田氏の紹介する豊富な事例から理解することもできるのだが、なによりも、その一読したところ不自然さのない、しかし予測不能な文章の運びがこの障害の状態をととてもよく描写しているといえるのではないか。そして〈健常者〉は、このような〈障害者〉とどのようにコミュニケーションを取れば、ときに自身よりも有能な側面をもち、しかしどこかで決定的に欠損がある彼らとともに無理なく生きていくことができるのだろうかと考えさせられるだろう。

障害のある人のコミュニケーション方法を理解

するのは困難だ。まずもって障害の範疇の取り決め作業が煩雑であり共通認識を得ることが一苦労となる。しかしこれは煩雑ではあるものの、あくまで便宜上の境界線を引けば良いだけの話でもある。仮に大まかに身体、知的、精神（発達）と分類したとして、より困難な課題は、そのうちの後者2つに関しては、当事者の世界観をそれ以外の者が知る手段が極端に少ないことにある。もちろん身体であってもアウトプットのパスが限られる場合は、周囲との間に大きな溝（あるいは〈障壁・障害〉と称されるもの）が生まれるわけだが、それは後者のように自己内で矛盾が起きてしまう困難さとは問題の本質が異なる。前者は対人間の、後者は自己内の矛盾だからだ。このような事情を踏まえると、〈健常者〉の聞き取りによる整理された、あるいは都合よく解釈された記録にはやや限界があることが想像できよう。もちろん専門家の解釈を否定することはしない。それこそ私自身の自己矛盾ともなりえるし、なにより手助けなしに当事者の発信する記号を読み解くことが不可能に近い場合もある。だが、やはり粗削りであっても当事者による発信がそのまま読者にとどき、読者自らがそのメッセージを分析することで、自身のコミュニケーション行動の内省が促されると考える。山田規畝子編著『高次脳機能障害者の世界—私の思うリハビリや暮らしのこと』は、その貴重な体験をさせてくれる一冊だ。

## 注釈

- \*1. 本書評では、山田氏に倣い、障がいの「がい」を〈害〉と記すこととした。
- \*2. 『壊れた脳、生存する知』、『壊れた脳も学習する』ともに角川ソフィア文庫。

## 参考資料

楽天ブックス「みんなのレビュー」

(<http://books.rakuten.co.jp/rb/5968529/>)

Amazon.co.jp「みんなのレビュー」

大沢昇 (2015) 『クジラの文化、竜の文明：日中比較文化論』 集広舎

趙師哲  
(愛知淑徳大学教員)

この本と出会った場所は、図書館の新刊紹介の本棚だった。そういえば、系統的に日中比較文化についての本を読んだことがないと気づいて、手に取った。私の中の日中比較は自分の経験からのものか、短い記事からのものか、極めて狭い視野から見るとのだった。今回はこの本をきっかけとして、マクロの視点から日中比較文化論を見てみようと思った。

個人的な経験の例を挙げると、曜日の言い方についてである。日本語を勉強しはじめたばかりの頃、どうして曜日の言い方はそんなに覚えにくいのだろうか、中国語のように一から六までの方が簡単で便利だろうと思ったのが最初の異文化体験であった。しかし、この本の中で説明されているように、日本語の場合は、実は陰陽五行に太陽と月を加えたものを使っている。他の文献を調べると、この七曜の呼び名は唐時代に中国に起こり、日本や朝鮮などに伝えられたそうだ。しかし、現代の中国語ではこれを使わなくて、日常生活で陰陽五行に関する感覚も薄くなってきた。また、この本の中で著者が日本の文化は「水」が代表し、中国の文化は「火」が象徴していると述べている。証拠として、中国の歴史神話、禹、舜、など及び日本の古事記を使っている。近代現代の出来事だけではなく、古代の歴史を分析しながら、日本及び中国の深層文化を比較対照する視点が面白く感じられる。

まず、簡単に本書の構成を紹介する。第一章は歴史、古代神話、考古学、人類学などの視点から見る両国の関係、言語、歴史及び政治の相違点について説明している。歴史に興味がある方はぜひこの章から読むことをお勧めする。第二章は衣食住に関する両国の文化の比較である。日常生活の範疇なので、中国の文化にあまり詳しくない人も楽しく読める章である。第三章は、文化が異なることの裏に、両国の国民性及び志向が違うことを示している。さら

に、対人関係や家族に関する概念における、日中両国の差異もこの章で書かれている。コミュニケーションについて関心を持っている本学会の方々がこの章を読むと研究との関連性を見出すかもしれない。第四章は美術や文学について興味を持っている人にぴったりの章である。経済活動が活発な競争社会であった江戸と明清の知識人たちの息抜きの仕方が異なったので、「浮世絵」と「山水画」のような真逆のタイプの作品が作られた。第五章は本のタイトルに戻って、著者からみる「クジラの文化」と「竜の文明」を説明している。タイトルに惹かれてこの本を手にとった人にとって、答えを見つけるのに最適な章である。

本書の一つの特徴は、ほとんどの読者は日本人だと想定して、中国についての説明が充実していることである。例えば「中国」という言葉自体、二つの意味を持って、一つは歴史的に使われた「真ん中の国」という意味の普通名詞で、「外国」に対応する言葉であった。もう一つは辛亥革命を経て中華民国や中華人民共和国の略称としての中国である (p.13)。このような説明は、ふだんこの二つの意味を混在させて認識している日本人にとって、とても分かりやすいと思う。

本書のスタンスとして、「文化は伝播・交流するものであるが、選択するものでもある」(p.26) としている。このような姿勢は比較文化を専門とする人々だけではなく、我々コミュニケーション学と関係ある人も取るべきだと思う。日本へ旅行しにきた中国人観光客から、京都の町並みや着物姿の日本人を見ると「唐は日本にある」という感想が出た。すなわち、中国五千年の輝かしい歴史を持つ炎黄の子孫(中国人)が大切にしていない歴史の価値を、外国人(日本人)が見出しているということである。しかし、著者は日本では纏足や科挙などを含む中国の文化をすべて無条件に受け入れたわけではないとも指摘している (p.26)。

本書から学んだこととして浮かんだことが四点ある。

一点目は、「一衣帯水」の意味について今までと違

う見解を示した。日中関係に関する四字熟語とさえ、先に思い浮かぶのは恐らく「一衣帯水」だろう。序章で真っ先に説明したのはこの言葉であった。そもそもこの言葉は異民族に使う言葉ではなく、

隋時代の中国国内で、隋と陳が長江という帯のような細い水で隔たれてはいるが、同胞なのだから再統一は必ずする、という皇帝の意思が含められた言葉なのだと言及した (p.9)。私が思うには日本と中国の間にあるものは「川」でもなく、「海峡」でもなく、「海」であることなのである。地球儀から見れば確かに近く見えるが、実際に海を隔てているから、両国が様々な側面で異なることが当然である。「一衣帯水」という四字熟語によって先入観となっているが、地理的に近いからなんとかしないといけないのではなく、本当に両国の平和のため何が必要かをもう一度冷静に考えなければならない。

二点目としては、中国の「皇帝制度」、日本の「天皇制度」といった政治文化の伝統が現代の若者たちにも影響を与えていることが挙げられる。単なる日中文化の比較ではなく、読者に両方の立場を明確にさせた上、どのように人生を過ごしたいかを考えさせる。

中国人は歴史の中で何度も「改朝换代」をし、新しい王朝を立ち上げたことについて「儒学は、皇帝が独裁政治を行うことを、『君権天授』で正当化したが、同時に『有徳為君』と考え、『易姓革命』も正当化した」(p.66)と著者は説明した。このような誰でもが皇帝になれるという伝統は、近代になって「白手起家」(裸一貫で身代を築き上げ、家を起こす)の精神に変わった。「努力して運が良ければどんな身分のものでも出世でき、まれには皇帝にもなれるのだ」(p.61)このような教えが中国人の起業家精神を刺激し、若者たちの活発な「起業」を支えている。最近のデータを一つ紹介しよう。韓国貿易協会国際貿易研究院が行った、2015年中日韓の若者の創業に関する調査によると「同じ首都圏の大学生であっても、卒業後に創業を希望する割合は中国が40.8%、韓国が6.1%、日本が3.8%となっている」。この差が出る理由の一つは「白手起家」という伝統が若者

を支えていると考えられる。逆に日本人は「家元」のような、千年企業や百年企業は尊敬するが、野心を持つ「起業家」には冷たいから、データが示すように起業する若者が少ない。

三点目は、コミュニケーションの視点から日中文化の差異を分析していることである。特に第3章では、日本は「恥の文化」(p.127)に対して、中国は「驕の文化」(p.128)という両国国民のアイデンティティの由来を述べた。それぞれはこのような文化を持っているからこそ、日本人は「以心伝心」や「問答無用」(p.158)のコミュニケーションスタイルに従い、中国人は「討価還価」(p.158)を守っている。「討価還価」はそもそも値段の交渉であり、当然説得力が必要となる。ただ、この中国式の説得方法は日本人から見れば「恥」と感じるかもしれない。しかし「驕の文化」を持っている「中国人にとって『恥』ではなく『誇り』なのだ」(p.170)と考えられる。

四点目は、日中関係が悪い中、本当に衝突ないし戦争が起こるかについて心配する人に対して、著者が明確な答えを示した。文化の面で真逆な現象が見られる「日本」と「中国」が本当に衝突するかという疑問に対して、著者は否定的な答えを出した。「なぜなら、中国の改革開放以来、日本と中国の人や文化の交流が増え、摩擦もそれに従って増加はしたが、それは日本文化と中国文化の融合の苦しみであり、またこの2つの文化・文明の交流は、巨視的に見れば世界の文明の融合の流れの一つだと思うからだ」(p.277)。

以上の四点の学びと同時にまだ不思議だと感じた点もいくつかあった。まず一つ目はどのような教育によって、今持っているお互いの国に対する考え方が生まれたのかである。私が受けた中国での教育においては、日本に関することは、国語では夏目漱石の小説の抜粋があった。歴史では大化の改新、明治維新と戦後の日本の復興、日中国交正常化などがあった。それら以外は甲午戦争(日清戦争)から侵華戦争までの間の歴史を中心に学んだ。これでは日本に対する親近感を持つようとしても持てないだろう。



一方、日本側の大学の入学試験の世界史の問題を見たことがある。古代や近代中国に関する問題がかなりの量を占めていてびっくりした。唐時代の税制、明時代の軍制、康熙帝の業績など、私が大学受験の後全部忘れてしまった問題があった。また漢文も勉強し、今から二千年前の文章を理解しようとしている。しかし、どうして高校の時一生懸命中国の歴史や古文を勉強するのに、大人になるとだんだん中国に対するイメージが悪くなり、感情的に過激になるのだろうか。

二つ目は日本文化及び近代化の成功に関することである。「日本人は、明治維新と文明開化、そして富国強兵、殖産興業の成功は、東洋文化と西洋文化の融合に成功した新しい東アジアの文明の誕生と考えたが、多くの中国人は、単に「物まね」のうまい日本が中国文明から西欧文明に乗り換えた小手先の修正で、「日本文明」などなく、そして東アジアを代表するなどおこがましい、と感じた」(p.280)。正直に言えば、私も日本に来る前はこんなふうに思っていた。

しかし、私は日本に来てから、いや、日本語を勉強してからいくつかの新しい発見があった。その一つは、「新漢語」であった。「経済」、「政治」、「科学」、「哲学」、「民主」、「革命」といった欧米の言葉を日本人が漢字を用いて作った訳語を清末から民国初期にかけて大量の中国人留学生が日本で学んで、中国に逆輸入したことである。言語学を勉強する人を除き、どうして中国ではこのことを知らせないのだろうか。その理由について不思議だと感じる。

以上2つの疑問を持ちつつ、読後感としては明るく希望を持った気持ちになった。自分の中で一番残っていることは「文化はというと、単に一方向に発展するものではない。それを形作るのは、基本的に風土や習慣、関係であって、どんな優れた外国の文化も、外国のものであれば一旦その民族によって消化するために何度も「咀嚼」された」である(p.283)。文化には上下がないと、私はいつも思っている。特にこのような比較文化に関する本を読む時、または自分の民族や文化を分析する時に自分の文化につ

いて多少優越感を感じたり、第一位に置いたりする傾向がある。こういう時こそ、冷静に謙虚に相手文化の良いものを見つけ、咀嚼し、自分の文化で使えるように改良することが大事なのではないかと考えられる。

二千年前の中国には平和を目指す「説客」がたくさんいた。彼らの発言を記述した文書は中国の高校生も、日本の高校生も『論語』として習っている。このような日中両国の人々が共有しているもの、且つ平和志向の談話を分析することはコミュニケーション学として面白い研究かもしれない。終わりになるが、「クジラの文化」にいる人であろうが、「竜の文明」に属する人であろうが、著者が言った通り、21世紀の「地球」はあまりに小さくなり過ぎたから、ユニバーサルな「文明価値」を求めて、日本文化や中国文化を再度、見直す必要があるだろう。

---

富田英典 [編] (2016) 『ポスト・モバイル社会：セカンドオフラインの時代へ』 世界思想社

宮崎新  
(名城大学教員)

本書のキーワードは副題にもあるように、現代の代表的モバイル端末である、スマートフォンによるインターネットやアプリ利用が作り出しているとする「セカンドオフライン」という概念構築である。セカンドオフラインとは、「オフライン」において「オンライン」情報を常時参照」することで (p.i)、「リアルな空間にバーチャルな情報が重畳されているような状態」(p.2) を指している。

簡単な例として、近年、多くのアプリやスマートグラスなどで可能となったAR (Augmented Reality : 拡張現実感) などによる人間行動などがそれにあたる。これまで一つまりスマートフォンインターネット前—インターネット上の情報収集やその活用とは、ある一定の場所 (例えば自宅や職場) でオンライン上のものを得たあとに、オフラインでの行動に活かされるような様式であった。しかし、セカンド

オフラインとは、例えば特定の場所に実際にいることでアプリが位置情報を元に画面上に適切な情報を提供し、それにより次の行動が決まったり (e.g., レストラン検索など)、カメラを通した画面上に実際には存在しないバーチャルな情報が提供されたりするという (e.g., 観光地におけるバーチャルな街並みの描写)、「いま」「ここ」という側面の重要性が切り離すことの出来ない要素となっている。

富田は、これを「いつでも」「どこでも」「誰にでも」つながるモバイル社会から、「いま」「ここで」「必要な情報」を提供するポスト・モバイル社会へ、そして、ユビキタスからセカンドオフラインへと、社会は動き始めている」と主張する (p.16)。1990年代以降、ポケベル (ページャー) を皮切りに PHS やケータイ (当時のフィーチャーフォンで、後のガラケー) で始まった文字コミュニケーションの拡大と日常化を経て、スマートフォンによって社会が次のステージに突入しているというのが本書の主張の中核である。

これらを可能にしているのは、まさにスマートフォンによる「パラダイム・シフト」(第9章)であり、農業化、工業化、情報化という波に続く「第四の波」による大きな社会変容を今の私たちは目の当たりにし、日常的に生きているのである。

本書は4部構成、15本の論文からなっており、日常、教育、育児、対人関係、仕事、災害、医療、社会運動、マスメディアなど、さまざまな場面と側面から、いかにスマートフォンによる、オフラインでのオンラインの重畳状態 (富田は、この指向性を強調し、それがセカンドオンラインではなくセカンドオフラインの概念の根幹であると主張する。そして、これらの現象は決して社会構成主義的なユーザーの恣意性とサービス提供だけで説明のつくものではなく、「技術社会論におけるアクターネットワーク論 (ANT) の観点からこの変化をとらえなおす可能性」(p.269) を強調する。とりわけ、ケータイの登場から絵文字や文字コミュニケーションの一般化のなかで、社会構成主義と技術決定論の二項対立によるニューメディアに関する議論が繰り返されて

きたことへ、再び一石を投じるものになっている。この点に関しては、第2章で岡田がかつての通信事業者や端末メーカーの担当者へのインタビューから、それが必ずしも社会構成的だけでなく、さまざまな要因の絡み合いによって起きていたという記述は、まさに一つの時代の流れを俯瞰的に考察した際に見られる点でもあり、非常に興味深いものであろう。

本書を手にした際、すでにその発行から15年近くも経った『ケータイ学入門 (2002年) 岡田朋之・松田美佐 [編]』を、当時、携帯電話の普及と共に「ケータイ」というカタカナ表記が一般化した頃にモバイル・コミュニケーション研究に興味を持ち始めた自分にとっては、このコミュニケーション現象の超加速度的な変化を再確認するきっかけとなった。

このモバイル・コミュニケーション研究の発展の中で、冒頭でも述べられている通り、編者である富田ならびに、執筆者の多くは公益財団法人情報通信学会「モバイル・コミュニケーション研究会」のメンバーであり、前述の「ケータイ学入門」の多くの執筆者を同じくしていることから、この分野の先導者の視点に触れ、新たな概念構築とその応用の一端を垣間見ることが出来る点でも、研究所としての価値があると言えるだろう。

また、特に「序章 メディア状況の外観とセカンドオフライン (富田)」と「第2章 モバイル先進国を生んだ業界事情—モバイル・インターネットとカメラ付き携帯電話の送り手たちに聞く (岡田)」は、ケータイ史とともに、日本におけるモバイル・コミュニケーションの誕生と発展を概観することができ、まさに現在の「スマホ世代」とも呼べる1990年代後半に生まれた学生たちにとって、一読に値する、教育的価値のあるものだろう。自分たちの日常化したコミュニケーションが、どのような足跡を経て定着し、しかもモバイル端末とインターネットによって、ほんのわずか20年足らずで (本人達には自分達の人生と同等で「長い」と感じるかも知れないが) 生み出されたかを知る上で、非常に有益であると言える。

アンソニー・ギデンズ (1993) 『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』(松尾精文ほか訳) 而立書房

宮武蓮

(静岡県立大学国際関係学部・藤巻ゼミ生)

「ポスト・モダンの秩序についての新たな解釈を提示したい」(p.16) と本書の中でギデンズは主張している。これは今私たちの生きる現代は、近代を越えた先の時代(ポスト・モダニティ)の時代に突入したのではなく、近代にて生まれた伝統や慣習に縛られない社会のシステムのもたらした帰結が徹底化、普遍化した「高度近代(ハイモダニティ)」の時代である、というのが本書におけるギデンズの主張の一つである。前近代と近代との隔絶、近代と現代との連続性。この関係性が本書を読み進めていく上で根幹となっているものだと感じた。

著者が本書の中で指摘している「脱埋め込み」と「再埋め込み」は、現在のハイモダニティの社会を構築するシステムの中でも特に私たちの生活に深く根付いているものだ。テレビや電話、SNSといったメディアの誕生によってもたらされた「脱埋め込み」は、どこにいても誰とでも関係をもつことができるようになった現在の社会関係を生み出した重要なファクターである。そのような社会関係の中で、様々な場のよく知らない他者との信頼関係を形成、維持していく作用が「再埋め込み」である。前近代とは隔絶された広大なグローバル社会の中で、自分のアイデンティティをどう形成していくか。現代に生きる私たちはその渦中に立たされているといえる。

本書で取り上げられているウルリッヒ・ベックの意見(p.150)はこの問題を身近に考えさせられるものだった。福島原発事故における風評被害や放射線を取り巻く問題はグローバル化に伴い離れた土地で起こった出来事を簡単に知ることができるようになった。これにより、離れた土地の食材を簡単に入手できるようになった現代ならではの問題が発

生じた。子供が食べた野菜とその原産地の原発事故による被曝被害ということがらは簡単に結びつくようになったのだ。この状況は「脱埋め込み」化されたメディアと身の回りの私生活との結びつきが強まった証拠である。メディアがもたらす情報に対する信頼と、可視化できないリスクとの付き合い方、そしてその情報を受けて自分がどのような選択をし、自分を形成していくか。例えば食品を買う際、原産地を確認しそれを買うかどうかを決める自由は消費者である我々にある。自由の許す範囲で情報に基づき自らの生活を構築していく、ということも自分のアイデンティティの形成と言えるのではないだろうか。

グローバル化の一途をたどる現代に生きる我々は、この二つの作用が生み出したシステム信頼の増大、並びにそれに付随する環境破壊や戦争といった「モダニティの負の側面」(p.20-22)と呼べるリスクに対する認知の高まりとどのように付き合っていかなければならないのか。本書を読み、その内容や実態を垣間見ること、今日を生きる指針を作るきっかけを探してみてもはどうだろうか。

---

好井裕明 (2015) 『差別の現在—ヘイトスピーチのある日常から考える』

宮脇かおり

(立命館大学教員)

「差別をしてはいけない。」そして「差別をするのは悪い人間であり、自分には関係のないことである。」と考えるのはとても常識的で、至極当たり前のことのように思える。本書はそういった、さもすると「当たり前」すぎる考え方に異を唱える意欲作である。

筆者は在日韓国・朝鮮人に対するヘイトスピーチを例に、いかに私たちが差別問題に対して、自分たちの日常とは無関係だ(p.59)という理解を作り出しているかを説明する。差別を、差別する側とされる側という二分法的見方で理解する時、被

差別者でなく、ヘイトスピーチのような極端な差別行為もしないいわゆる「普通」の人たちは差別問題の「外」にいることになる (p.58)。差別とは、差別される人たちと差別をする極端な人たちの間でのみ発生している問題で、差別などしない自分には関係のないことだという思考に陥る。そうすると、日本社会で確かに起きているはずの差別問題は「他人事」(p.14)になってしまうと筆者は繰り返し警告する。

本書は、差別という営みを「なくすべきもの」としてだけ考えるのではなく、「そこにあるもの」「どうしようもなく起こってしまうもの」として考えること (p.20)、そして「反差別の身体づくり」から「他者を理解できる身体づくり」へ、さらに「差別を考えることができる、しなやかでタフな日常的文化の創造」(p.21)を提唱する。

筆者によると、「差別する可能性」から自らの日常を反芻し、反省することとは、まさに「他者を理解しようとする、ただそう簡単には他者は理解できない」ということを考え直す営みである (p.100)。別の言葉で言うと、相手を「わかる」ことがもつ最大の意義は、「わからない」ことへの気づきである (p.103)、としている。そして「他者を理解できる身体」とは、頭の中だけで理解したということではなく、他者と向き合うときにそれまで自分が囚われていた常識を自覚し、その問題性を考えながら、他者をどのように認め、自分がいかに適切にふるまえるかといった、私たちの日常的な意識や行為の変容が伴う現象 (p.100) であるとまとめられている。

筆者は社会学者であるが、コミュニケーション学者と興味が重なる部分も多く見られた。特にヘイトスピーチやメディアの中にある暗黙の差別意識やイデオロギーを指摘する手法は、私自身が専門とするレトリック分析とかなり親和性があるように思う。わかりやすい日本語で日本人読者に身近な題材を用いた本書は、学部生向けの教材の一冊として適しているのではないかと思う。特に、自分はヘイトスピーチや差別はしないし、関係がないと思っているような学生にまず読んでもらいたい一冊である。

逆に言えば、新書なので仕方がない部分も大きいですが、研究者目線で読むと少し物足りなくも感じた。人種差別、障害者差別、ジェンダーの問題などはすでに研究者の間では論じられている視点が多く、特に目新しいと感じるものはなかった。しかし巻末にまとめられた「差別を考える映画ガイド」は日本映画だけではなく海外の差別に関する映画が豊富に紹介されていて、筆者による感想も示唆に富むものであった。メディアと差別を考える際にぜひ参照したいガイドである。

現在、アメリカ合衆国でのトランプ政権誕生やイギリスのEU離脱など、多文化共生に逆行する現象に世界が震撼している。コミュニケーション研究者として海外の事例を精査することももちろん重要であるが、日本国内の差別問題、特に目に見えにくい差別意識を可視化していくことも、日本社会に生きるコミュニケーション研究者にとって重要であると再認識させられる一冊であった。社会に存在する差別やそれに対抗する市民運動といった分野を研究する身としても、自らが差別する可能性というものは常に意識しておかなければならないと決意を新たにさせてもらった。筆者も指摘するように、他者をカテゴリー化、ステレオタイプ化することは「常識」に内在し、私たちが無自覚に行使してしまう「微細ではあるが執拗で力強い権力」(p.119)である。私はその権力を可視化していくのがレトリック研究の大きな意義であると考えているが、まずは自らがそのような権力に無意識に加担していないか、常に内省することを忘れないよう襟を正したい。